

---

# バカとバスケと召喚獣

六甲水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとバスケと召喚獣

### 【NZコード】

N5239Y

### 【作者名】

六甲水

### 【あらすじ】

「明久。一緒に小学校に行かないか?」突然の雄二の一言。最初は「雄二」。さすがにロリコンはマズイと思うよ」と思った明久であったが、雄二と翔子の小学校の頃の先生の頼みで、小学校の女子バスケット部のコーチを頼まれるが……

## 第1話 小学生たちとの出会い（前書き）

とこつわけで、活動報告で伝えたとおり、バカとバスケを全部消し、新しく書くことにしました。ちなみにとある理由で姫路と美波の二人は全然出ません。

## 第1話 小学生たちとの出会い

その出会いには雄一の一言からであった。

「明久。少し頼みたいことがあるんだ。」

「ん? どうしたの雄一?」

休日のある日、明久の家に遊びに来ていた雄一が突然頼みごとをしだしてきた。明久はどうせ、またくだらないものだと思っていたが

「明日の放課後、一緒に小学校に行かないか?」

「.....」

雄一の突然の発言を聞いて、明久は携帯に手を伸ばし.....

「あ、もしもし、霧島さん。雄一がロリコン!」

「待つてくれ、明久。誤解だ!」

「霧島さん。今すぐ来てくれるって」

明久がとてもいい笑顔で言うと、雄一は明久の胸ぐらを掴み、

「お前、頼むからそういうことは.....」

ピンポーン

突然呼び鈴が鳴り出した瞬間、雄一の体は凍りついた。

「霧島さん、来たみたいだね」

「くそ、明久。この恨みは忘れないからな」

「…………雄一。小学生に恋するのは良くない。」

黒いオーラを出した霧島さんが雄一の顔を掴んで言った。それから數十分後僕の部屋は赤い血で染まるのであった。

雄一が蘇生し終わり、事情を聞くことにした僕。ちなみに霧島さんも一緒にいた。

「たくつ、明久のせいでひどい目にあつたぜ。」

「いやだつて、こきなりあんなことを言われたら誰だつてそう思つよ」

「…………吉井の悪いつとおつ。」

「だからつてな。まあいい。実はな俺と翔子の小学校の頃の担任から連絡あつてな。いまその担任の知り合いがいる慧心っていう学校

でバスケの「一チを頼まれたんだ。」

「バスケの?でも、雄二つて有段者とかじゃないよね。なのにどうしてそんなこと頼まれたの?」

僕がそう聞くと雄二は何故か渋い顔をしていた。すると雄二の隣に座っていた霧島さんが代わりに答えてくれた。

「……私たちの担任の知り合い、美星つていうんだけど、その人の甥っ子さんにもコーチを頼んだんだけど、その人だけじゃちょっと手が足りないから……」

「よつするにだ。俺たちはその手伝いをするということだ。俺と翔子は小学校の時に世話になつたから手伝うことにしてたんだが、折角だから明久たちにも手伝つてもらおうかと思つてな。」

雄二が笑顔でそう言つていたけど、僕は雄二に耳打ちをした。

「それで、実際は?」

「翔子と一緒にいたら命がいくらあつても足りないからな。明久たちも巻き込んでしまえつて思つたんだ。」

「雄二、そこまで霧島さんと一人つきりになるのが嫌なんだ。でも、バスケか。少し面白そだからコーチやつてみようかな。」

「僕はいいよ。秀吉やマッソリーにも頼もうよ。それに姫路さんや美波にも」

「秀吉とマッソリーは既に頼んだ。一人も最初、俺のことを口

「コン扱いしてたけどな。姫路と島田は放課後ちょっと残れないから参加しないってよ。」

「そつか、とりあえずそのコーチしに行くのはにつくらーなの?」

「今週の月・水・金だ。学校終わったらその甥っ子と途中合流して、小学校に行く。」

「うん、分かつたよ。」

「うじて僕らはバスケのコーチをすることになった。」

そして次の日の放課後、雄一と霧島さんの担任の知り合いの甥っ子との待ち合わせ場所に来た僕ら、そこで待っていたのは……

「あつ、どうも、初めまして。長谷川昂です。つて明久」

「甥っ子って昂だったの?」

僕の顔を見て驚く昂。僕も結構驚いていた。するとどうこう関係か気になっていた女の子にしか見えない男の子、木下秀吉が聞いてきた。

「明久よ。そっちの甥っ子とお主はどういう関係なんじゃ？」

「うん、僕の家の近所に住んでいる人だよ。」

「それにしても、ミホ姉からコーチの手伝いのする奴が来てくれるって聞いたけど、まさか明久だったとはな。」

「まあ、本来は雄一が頼まれたんだけどね。」

「僕と昴の二人がそんなことを話していると、雄一がバス停の前で大声で呼んでいた。」

「おーい、早く行くぞ。バスに乗り遅れるぞ」

「遅刻したら洒落にならないね。早く行こう。昴」

「ああ、そうだな。」

久しぶりにあつた昴だけど、何だか様子がおかしい感じがした。一体どうしたんだろう？この間会ったときは凄くバスケに燃えてたけど……

バスに乗ってしばりくし、目的地である慧心学園にたどり着いた僕ら、そして学園の門をくぐり、体育館の扉の前に来ていたけど……

「なあ、明久。」

「何？昂？」

後ろにいた昂が何かを聞いてきた。それは……

「あそこのカメラ持つてん奴。大量に鼻血出してるけど、大丈夫なのか？」

昂が言つていた人物はムツツリー二だつた。本名は土屋康太。通称『寡黙なる性職者』色々と盗撮、撮影や盗録、録音機器の機械などにも詳しく、さらには工、保健体育に詳しかつたりするけど、本人はそれを認めていなかつたりする。ちなみに実際の工口いことに対して免疫がなく、鼻血を出していたりする。

「まあ、歸もそのうち、なれるよ。」

「あんまり慣れたくないけどな」

「ほら、無駄な話してないで、早く入ろうぜ」

雄一がそう言って、とりあえず僕らは体育館の扉を開いた。その先には

「お帰りなさいませ、ご主人様&お嬢様！」

「えつ？」

「わわわああああああああああ！」

「...田の毒」

扉を開けた先にはメイド服を来た五人の少女たちだった。そしてその瞬間、霧島さんが雄一の目を潰していた。

## 第1話 小学生たちとの出会い（後書き）

とりあえず、姫路さんと美波の二人は原作三巻の話で登場させるつもりです。次回はまあ、自己紹介話になりますね。

## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ（前書き）

まあ、今日は自己紹介回になります。

## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ

体育館に入った瞬間に、メイド服の少女が5人待っていた。ちなみ  
に雄一は霧島さんに目を潰されて、凄く痛そうにしていた。

「あの、あの人、大丈夫なんですか？隣の黒髪の人に目潰しされて  
いたような……」

するとピンク髪の女の子が雄一の事を心配そうに聞いてきた。まあ、  
確かに僕らの場合は日常茶飯事だから慣れてるけど、この子達の場  
合はまづっと刺激ありますぜだよな。

「大丈夫だよ。雄一はああいう風にやられると慣れてるから

「え、あの、」

「とりあえず自己紹介でもしようか。」

「はあ、」

まだ納得行つてないみたいだけど、このままこの子が雄一の心配し  
てるところ……

「雄一、何、小学生に心配かけてるの？」

「待て、翔子。首を……」

死ぬ可能性が高くなるからね。

とりあえずお互いの自己紹介をすることになった僕ら、まずは女バ  
スメンバーから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆でーす」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉…です」

「ひなた、袴田ひなた」

「せーの…」

「　「　「　「　「　ようじくお願ひしますー」ご主人様。お嬢様」」」」

五人が礼儀正しく礼をしていた。でも、少し気になることがあった。

「あの、そのご主人様はちょっと……」

「うん、さすがにバスケの「一チなのにそれは……」

僕と昴の一人がそう言つと、真帆ちゃんがむくれて、

「ええー、いいと思つたんだけどな。」

「それじゃあ、お兄ちゃんで」

まあ、まだそつちの方がマシな気がするからいいか。とりあえす、僕らも自己紹介しなきゃ、

「えつと、それじゃあ、俺からだな。俺は長谷川昂。知つてると思つけど、ミホ姉……美星先生の甥っ子だよ。」

昂くんは普通に自己紹介してた。お次は僕だな。

「僕は吉井明久。よろしくね。」

至つて普通の自己紹介をしたけど……

「ね、あの人バカっぽくない？」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言つちや」

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

真帆ちゃんの一言で、何だか僕の心がすくへ傷ついたよ。あれ? 何だか涙が……気のせいだよね。

「まあ、明久よ。小学生にバカ呼ばわりされて泣くんじゃない。次はわしじゃな。わしは木下秀吉じや。」

「ねえ何での人、女性なのに男物の制服来てるの?」

「 もうと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「 こや、 ワシヰ……」

「 ほひ、 自分のことをワシと呼んでるしね」

「 わいは関係なこと思ひのじやが……」

またまた真帆けやんの一言から始まった。でも、 しょうがないよね。秀吉はどうかう見えても男には見えないからね。」

「 明久よ。お主、 何かおかしな事を考えてないか?」

「 気のせいだよ。秀吉。秀吉は小学生でも女の子にしか見えないって思われてもしょうがないって、思つてないよ。」

「 やっぱり、 おかしな事を考えていたではないか。」

次はムツツツリーーーの番だけど……

「 なあ、 明久。 もうきからあわいと写真撮つてるナゾ、 犯罪にならないのか?」

昴はそつまつと、 僕は昴が見つめる方を見るとムツツツリーーーは智花ちゃんたちのメイド服を熱心に撮影している。

「 ..... これで需要が.....」

「 ムツツツリーーー。 それ、 一応言つておくけど、 犯罪だからね。」

僕が写真を撮つていて「ミッシーー！」と思いつつ、ミッシーーは思つてきり首を横に振る。

「おもこつさり呑むしてゐるが、みんなにバレバレだからな

「…………これ口止め料」

ミッシーーはさう言つて、昂くんに一枚の写真を渡した。その写真に映つていたのは……着替え中の女子高生の写真。

「これ、盗撮だらーーー！」とか、口止め料つて

「あの、何の写真なんですか？」

智花ちゃんが昂が持つていた写真を見ようとしたけど、昂くんが一瞬の内にその写真をビコビコに破り、ゴミ箱に捨てた。まあ、あんなの見たら卒倒しちゃうよね。

「とりあえず、見た通りだけど、さつき写真取つてたのは土屋康太つていうんだ。」

「…………よひしゃべる。」

あとは残つてるのは雄一と霧島なんだ。

「次は俺だな。坂本雄一だ。俺たちは長谷川のコーチの手伝いとして來てるからよひしくな。それで、いつまでも……」

「…………霧島翔子。雄一とは婚約者」

「 「 「 「えええ————」 「 「 「

「高校生つて凄いんですね。」

「お、大人だあ———」

「それに婚約者つて、もしかしてけ、結婚間近つて」とですか?」

「す、すいこです。」

智花ちゃん、真帆ちゃん、紗季ちゃん、愛莉ちゃんの四人は雄一と霧島さんの関係について凄く盛り上がっていた。その問題の二人はと言つと……

「翔子!小学生に嘘を吹き」むな

「……嘘じやない。ちやんと婚約届用意してあるから。……」

「あれは、お前が勝手に……」

「雄一」と霧島さんのやり取りをじつと見てゐる僕と歸と秀吉(ムツリーニ)は[即真撮影]。するとひなたちやんが僕らにあることを聞いてきた。

「おー~お兄ちやん。馬鹿なお兄ちやん。おねこひちやん。こんなやくしゃつて何?」

「「」お兄ちやんやなくつて、婚約者だよ。ひなたちやん。とりあえず簡単に言ひつけ。近く内に結婚する一人のことだよ。」

「おー、やつなの?じゃあ、おっこお兄ちゃんと綺麗なおねえちゃんは結婚する?」

「あはは、そんな」としたが、恐怖に集団に雄一がボロられたりあるね。」

僕がひなたちやんこそんなことを言つて居るなか、昂と秀吉さるつて……」「なんか、明久の学校つて怖いといふのか?怖い集団じボロられ

「それより、袴田のおねこちゃん。絶対言つてじぶん

そんなんなで、お互いの皿皿紹介を終える僕だけだった。

とつあえず昂は智花ちやんたちにメイド服から着替えたひつひつといい、智花ちやん達が体操服に着替えて、僕らの前に来た。

「「「「おまたせしましたー」「」「」「」「

「それじゃあ、みんな始めよつか」

「「「「「もう少しでも願こしもーか」「」「」「」「」

昴の号令でバスケの練習を始めるのであった。基本的には昴が指導とかして、僕らは智花ちゃんたちと一緒に参加したり、個人レッスンをしたりしていた。ちなみに個人レッスンの相手は

智花ちゃん&秀吉ペア

真帆ちゃん&僕ペア

紗季ちゃん&霧島さんペア

ひなたけちゃん&マッシィリーペア

愛莉ちゃん&雄一ペア

でやる」となった。それにしても、マッシィリー、ひなたけちゃんに教えてるのはいいけど何だかたまに隠し撮りしてゐるのさ……

そんなことを心のなかで突っ込みを入れてると真帆ちゃんがあることを聞いてきた。

「ねえねえ、あつあつ？」

「あつあつ？ああ、あだ名？何？真帆ちゃん」

「わ、わ、あばるに言われたんだけど、おふざんすつて何？」

「オフーンスつて、いつのまは攻撃のことだよ。トイフーンスは守つ」

「おお、バカそりに見えて意外と知つてゐるんだね。あつまーは」

「真帆ちゃん、結構一言が多いよ。それに……」

「馬鹿な。明久がオフーンスの事を知つているだと」

雄一も僕の事をどれだけ馬鹿にしてゐるか。やれぐらじ知つてゐるからね。

とりあえず練習を続けていくと、雄一が愛莉ちゃんにあむことを言つた。

「せういえば、香椎は背が高いからトイフーンスの方が向いてるんじゃないのか?」

「　　「あー」　」

「えぐ……ふええええんー」

雄一の一言で愛莉ちゃんが突然泣き出した。僕らは愛莉ちゃんを泣かした雄一を思いつきり避難した。

「雄一、何言つたか知らないけど、下ト座しなきや」

「小学生を泣かせるのはこかんと悪ひわるこ」

「…………こじめかつこわるこ」

## 「雄一、小学生泣かしちゃ、駄目」

霧島さんに折檻を受けていた雄一。眼も心配せつて遊莉りやんを見ていると、智花ちやんが…………

「あの、長谷川さん。吉井さん。愛莉、身長がコンプレックスなんです。背の」といわれるあんな感じ」……」

「どうすればいいんだ？」

「とつあんて誕生日のレトを貰えよ……」

「よし、呪。早く愛莉ちゃんを落ち着かせよ!…………ついマッシュコ<sup>一</sup><sub>ヘ</sub>。」

気がつくとムツツリーが愛莉ちゃんに何か言っていた。すると愛莉ちゃんは直ぐに泣き止んだ。

「ムツツヨーニ？ 愛莉ちゃんに何言ったのかな？」

「小学生のつちは背が伸びやすいからしじうがない。だが、直ぐに縮む。って言つてましたよ。」

紗季ちゃんがムツツリー二が愛莉ちゃんに言った言葉を教えてくれた。ムツツリー二、意外とやるかも…………

その後、愛莉ちゃんが僕らにいきなり泣いたことを謝つてきたけど、僕らは気にしてないよって答えた。それに、原因の雄一は責任持つて折檻受けてるし、

とりあえず雄一が復活し終わり、練習を続けているなか、僕はフツと智花ちゃんのショートを見た。智花ちゃんのショートは見事にゴールに入つたけど、それだけじゃない。ショートスタイルがとても綺麗で……見とれてしまった。そのことを昂に言つと……

「智花は確か経験者つて聞いたけど、あれは凄いな」

「うん、凄く綺麗だつたよね。」

僕らはそのことド盛り上がるのであった。

その後、練習も終わり、昂の従兄妹の美星先生の車で昂と一緒に送つてもいいのであった。

「いやあ、悪いね。まさかこんなに多くなるとは思ってなかつたけど、」

「たぐつ、ミホ姉。確認しないから」

「僕も雄二に頼まれたときはあんまり乗り気じやなかつたけど、ちよつとコーチやる気が出てきましたよ。」

「おつ、せつちのバカそつな奴は眞面目だな。なあ、昂。」

バカそつてひどい言われようなんだけど……

「でも、三口の約束だろ。」

「雄二も三口だけって言つてたけど、僕は続けてもいいと思つ。」

僕がそういうと昂は何故か浮かない顔をしていた。一体どうしたんだろう? とりあえず雄二に三口だけじゃなくて、これからも続けよつて相談しようと僕は思つたのだった。

## 第2話 初日からドタバタ騒ぎ（後書き）

やつぱり雄一がひどい田に…………まあ、姫路さんと美波がいないせいで明久は結構ひどい田にあわないからですけどね。

### 第3話 脊迫文といい田畠（前書き）

何だか昴の影が薄くなつて来ましたけど、頑張つて濃くします。

### 第3話 齋迫文と三田田

「一チ一田田、僕は雄一にもうと一チを続けよつと書ひたけど、雄一は「めどじくわい」と言つて、説得に失敗した。とりあえず、僕らは一田田の一チを続けることにした。ちなみに秀吉は演劇部の用事で来られなく、ムツシリーは新型のカメラを買いに行つて来られない。なので、今回は僕、雄一、霧島さん、昂の四人でやることにした。

「じゃあ、シユートとバスの練習に分けよつか」

昂の指示で真帆と紗季はシユート練習、智花とひなたと愛莉はバス練習に分かれた。バス練習では雄一と霧島さんが「一チ、シユート練習は僕と昂が「一チをする」とにした。

昂が智香ちゃん達の練習を見て「こんな事を書ひていた。

「智花は経験があるから上手いな。紗季と真帆は初めてにしては上手くなつていつてる。愛莉とひなたは時間がかかりそうだな。」

「でも、みんな頑張つてるね。」

「ああ、やうだな。」

昂はそつまつしてゐるけど、たまに浮かない顔をしてゐる。一体どうしたんだる?~。

練習を一旦終わらせ、みんなで休憩を取っていた。雄一と昴と智花ちゃんは練習メニューを見ていた。僕と霧島さんは愛莉ちゃん、ひなたちやん、紗季ちゃんの三人と色々と話していた。

「ねつこえぱ、吉井さん達つて、あの文月学園にいるんですね。」

「うそ、やうだよ。」

「文月学園つて、あの召喚システムのへりもつと怖いなあ……」

「……大丈夫。結構可愛い。」

霧島さんが笑顔でそうつと、ひなたちやんが……

「おー、ひなも召喚してみたい。」

「あはは、機会があつたらね。」

他愛のなことを話していくと、突然真帆ちゃんが……

「困るー。」

大声を出して雄一たちになにか言っていた。僕と霧島さんは雄一がまた変なことを言つたのか思つたけど、

「じつじつー? ゲームなら一時間でレベル3くらいのへい……」

「あのな、それはゲームの話だ。三沢たちの実力なら一ヶ月くらいい

頑張れば直ぐに強くなる。だから.....」

「一ヶ月じゃ待てないよー！」

「…………無理なもんは無理だ。」

雄一がそう真帆ちゃんに言った。一見冷たく言つてゐる氣がするけど、雄一の言つのは正しい。けれど、真帆ちゃんのあの必死な感じ……

「アーティスト...」

「あ…！」

真帆ちゃんはそのまま体育館を出ていってしまった。僕は真帆ちゃんを追いかけようとしたけど、紗季ちゃんに止められた。

「『めんなさい』。吉井さん。『』は私に任せてください。長谷川さんも坂本さんも『迷惑をかけてすみません。気にしないでください』

L

そう言つて紗季ちゃんは真帆ちゃんを追いかけていった。僕と霧島さんはどうすればいいのか分からなかつたのだった。

「一チを終えて、みんなで体育館を出ようとした時の『い』、

「真帆ちゃん。一体どうしたんだね?」

「……雄一と長谷川がきつこいつたから傷ついた?」

霧島さんがそつぱつと雄一が機嫌悪わざわざついた。

「あなた、この間の香椎の場合は知らなかつたからしようがないとしてだ。今回の件で女バスメンバー何か隠してるな。」

「隠してる?」

「ああ、その態度を見てそつぱつただけだな。ついあえず後一日だけだ。俺も今日のことは忘れよつとゆつ。」

雄一がそつぱつて、靴を取つた。隠してゐて一体何をふつと鼎の方を見ると鼎は紙切れを見て驚いていた。

「どうしたの? 鼎?」

「あ、いや、なんでもない。俺は先に帰るから……」

昴はそう言つてそのまま走つていった。

「どうしたんだろう。」

僕はそう咳きながら靴を取るうとすると靴の中に一枚の紙切れが入っていた。その紙に書いてあったのは……

『今すぐ女子バスのニーちゃんをやめる。そもそも二どびご用にあうが

僕はそれを見て、雄一に見せた。雄一は……

「これは子供の字だな。どうこもきな臭くなつてきた。』

雄一の表情は険しかつた。でも、いったいこんなこと誰が……

それから二日目の日のこと、今回は秀吉たちも参加できるので、六人で一緒に体育館に向かっていた。途中、雄一が……

「長谷川。お前もあの警告文のこと知ってるな。」

突然雄一がそんなことを言い出すと、事情を知らない秀吉とムツツリ一には……

「警告文? どうして? どうや?」

「…………どんな文だ?」

「これだよ。」

そう言って、僕が一人に例の紙切れを見せると一人も険しい顔をしていた。

「これは…………冗談にしては笑えんのう」

「コクシ」

「俺のところにもその警告文あつたけど、」

僕らはその警告文について話していると……

「雄一、あれ、」

僕らは霧島さんが指を刺した方を見るところには小学生5人の男子が並んでいた。

「おい、女バスのコーチたちだろ。話がある」

僕らはそのまま体育館の裏まで連れてこられ、その5人からの話によると男子バスケ部のメンバーで、昨日の紙切れを書いたのは自分たちだといった。

「君たちがあの紙切れを…」

「今すぐ女子バスケ部のコーチをやめろー！そもそもなれば…」

「コーチなら今日で終わりだ。」

昴がそう言つと、何故か小学生たちは驚いていた。とりあえず、僕は事情を説明した。

「元々僕らは三日約束だから、今日がその最終日。」

「そ、そつか…」

「なんだよ竹中、脅かすなよ…」

「だって真帆がす」）コーチがいりて自信満々だったから……じゃあ、試合には……」

「試合？」

「じつせう、こいつらのほうが色々と事情を話してくれそうだな。」

雄一が笑みを浮かべながらそう言つていた。確かにあんまり事情が

わかつていない僕らには知るチャンスが来たという事かな?

男バスから試合のことなど色々と事情を聞くと……

「今度の日曜日に俺たちと女子バスケ部で試合をするんだよ。あんたたちはそのためのコーチだろ?」

「なるほどな。三沢のあの態度、納得がいった。お前らと女バスは何で試合するんだ?」

「体育館の練習場所をかけてだよ」

「体育館をかけて? 何でまた、「

僕がそう言つとリーダー格の子が答えた。

「俺たちは昨年の地区大会で優勝をしたんだ。でも、実力はまだまだだから練習したいと思ってる! だけど、女バスが練習で使ってるから黙りだつて……それで顧問に相談したら今度は美星と喧嘩して、いつの間にか試合で決めようつて話になつたんだ」

「待つてよ。一緒に練習すればいいじゃんか。なんでそんなことを……」

「はあ? あんた、バカそつた顔してるけど、本当に馬鹿だな。」

また小学生に馬鹿にされた。けれど、落ち込む前に彼が言った言葉を聞いてそんな気なくした。それは……

「あんなヘタクソな奴らと練習なんてできるか！アイツらのバスケなんて…ただの遊びじゃねえか！」

「ヘタクソ？遊び？ふざけんなよ…智花ちゃんたちは確かに今はそんなに上手くはないけれど、一生懸命練習してるんだぞ。そんな子たちの頑張りを遊びだつていつのかよ。ふざけんな…いくら小学生とはいえ、言つていこう事と悪いことの区別も付かないのかよ…」

「落ち着け。明久。こんな子供に切れてもしょうがないだろ。」

「やうじゅ、たかが子供の言つ」とじゅ、眞にすると」とはない。」

「雄一と秀吉の二人が止めに入つたけど……………あんなことを言つのはひどいと思つ。」

「悪いな。竹中とやら、さつきも言つたように俺らは三日だけの約束だ。俺らの知らずの内に美星のやつに利用されただけのいわゆる被害者だ。今日で美星に頼まれたコーチの田程は終わりだからな。安心しろ」

「ちつ、分かったよ。解放してやる」

竹中がそう言って、どこかへ行つたけど、でも、僕は智花ちゃんたちの事を馬鹿にされたのは凄くむかついていた。

「雄一、いいの？」のままじゅ智花ちゃん達が……

「まあ、元々約束だし、長谷川もそう思つてゐるからな。」

「雄一がそつ言つて昴の方を見た。昴は……」

「明久、俺も女バスのみんなにそこまであります」とは出きない。……

「…………分かったよ。雄一はともかく昴までそこまで腑抜けなやつ  
だつて思わなかつた。もう勝手にしたら、僕は帰る。」

「ま、待つのじゃ、明久」

「…………明久」

明久はそのまま歩いてどこか行つてしまい、秀吉とムツツリーーは  
明久を追つ。残された俺と翔子と長谷川は……

「たくつ、あの馬鹿は…………」

「雄一。見捨てていいの？あのままじゃあの子達…………」

「悪いが、頼まれたのは二日だけだからな。それに…………」

俺は長谷川を睨むと、…………いつ呟いた。

「長谷川、お前、どこかでもうバスケは諦めてないか？」

「えつ、」

「美星から聞いたけど、お前が通ってる高校のバスケ部。活動停止らしいな。その所為かお前はバスケ自体嫌いになりそうになってる。そうだろ？」

「…………ああ、だけば…………」

「だけど、やっぱり気になるんだね。あの子達が…………」

「や、そつだな。」

長谷川は暗い顔をしてつぶやくと、俺はため息を付いて体育館から背を向けた。

「悪い、俺は今日は帰らせてもらひ。今日のコーチはお前に任せた。行くぞ、翔子」

「…………雄一。」

俺と翔子はそのまま湊たちと会わずに帰るのであった。残された長谷川は……

「…………」

ただ黙つたままだった。

「雄一、いいの？私は吉井の悪いとおり、もう少し続けてあげたい。

」

「たぐつ、約束は約束だからな。守らないといけないからな。だけど…………残りの一週間は勝手にやらせてもらひうがどな」

「え？」

「男バスの連中は二つミスを犯した。一つは俺たちは馬鹿だからあんな奴らの脅しに屈せずに……勝手に湊たちのコーチを続ける。二つ目は…………男バスは明久を怒らせた。明久はどんなでもない馬鹿だが、馬鹿をなめたら痛い目に合ひことを教えてやらなことな。」

「そう、やつぱり雄一は凄いね。」

「ふん、」

### 第3話 脊迫文と三田目（後書き）

とりあえず、次回は玲姉さんの登場です。明久、頑張れ。

## 第4話 姉とハロロ（前書き）

お待たせしました。今回は玲さんの登場です。

## 第4話 姉とバスケット

休日、明久は自分の部屋である本を読んでいた。

「うーん、やっぱり素人じゃ上手く教えるのは難しい……」

「アキくん？ ちょっとといいかしら？」

明久の部屋に入ってきたのは、明久の姉、吉井玲だった。明久と違ってかなり頭も良く、今は明久の一人暮らしの監視に来ているのだが、明久のことが物凄く好きすぎている。

「何？ 姉さん？」

「ちょっと……あら？ 何読んでいるのですか？」

玲は明久が読んでいた本を奪った。明久が読んでいた本は……『バスケット入門書』と書かれた本だった。

「あら？ アキくん。バスケでも始めるの？」

「あ、いや、ちょっと……姉さん。ちょっと相談に載つてもいいたいんだけど……」

「何かしら？」

「実は……」

明久は今、自分が智花たちのバスケのコーチをしている事や男子バ

スケ部に言われたことを話すと……

「アキくんが口っこな」と……」

「違うからねー話し聞いてたー?」

「まあ、[冗談はさておき、アキくんはどうしたいんですか?]

「やつや、続けたいって思ってるよ。だって、あんなに頑張ってる智花ちゃんたちのことばかにするなんて……あんまりだよ。」

「やうですか。じゃあ、続けたらいいと思こますよ。アキくんがそう思つているんだつたら……」

「うそ、分かつたよ。といひで姉さん。僕に何か用なの?」

「ああそうでした。やつを料理をしようとしたが、コンロが壊れて火がつかなくなつたので、今日の夕御飯は抜きで……」

「いや、それ、ダメだよ。ところが修理に出すとか考えてよ。」

明久がちよつと抜けた玲に突つ込みを入れる中、ある事を思い出した。

「やうだ。姉さん。昂の家でコンロ借りよつよ。」

「ああ、やつを聞いていたマーチをしてる。こいですよ。」

明久と玲の二人が食材を持つて長谷川家に訪れると昂の母親七夕が出てきた。

「あら、吉井くんじゃない。どうしたの？」

「『めんなさい。ちょっと事情があつて……』口壊れちゃって……キッチン借りていいくですか？」

「あら、でしたら今晩は一緒に食事どうかしら？」「一度今、昂くんがお密さん連れてくるので、」

「お密さん？」

明久がそう言つと、直ぐに昂が帰ってきた。昂の隣には智花がいた。

「あれ？ 明久。」

「おじやましてるよ。智花ちひやんも久しぶり

「お久しぶりです。吉井さん。」

「じゃあ、七夕さん。僕も手伝います」

「あらありがとう。」

明久が料理の手伝いをしている中、明久は昴の顔つきが変わったことに気がついた。

(何があつたのかな?)

明久がそう思つていると、昴がキッチンの方へ来て、こう言った。

「明久。俺、さつき決めたんだ。俺、男バスとの試合までコーチ続けるよ。だから……明久にも手伝いを……」

「そつか、僕も実は一人でみんなのコーチをしようつて思つてたんだけど、頑張つて勝とう男バスに」

「おう」

## 第4話 姉とハロロ（後書き）

何だかすっ飛ばしそぎてすみません。次回はコーチ再開となります

## 第5話 再開といつ名 前編（前書き）

久しぶりの更新ですみません。今回は前後編にわかれます

## 第5話 再開と「一つ名」 前編

「一チを再開する前日の夜、雄一は僕の家に来ていた。

「たくつ、いきなり呼び出しあがつて……」

「「」あん。雄一ーーでも、今しかないと思つんだ！頼む！一緒にバスケの「一チを手伝つてもらえない？」

僕は土下座をしながら雄一に頼み込んだ。すると雄一はため息を付いた……

「ふう、たくつ、その事か。いいか、明久、俺たちが美星に頼まれたのは三日だけだ。頼みの追加なんて聞いてないし……」

「お願ひだよ雄一ーーもう秀吉とマツツリーーーは頼んだし、昴くんもやる気出してるんだよーーあとは雄一が「一チに参加してくれれば……」

僕は必死に頼み込んだ。けれど雄一は頭を搔きながら答えた。

「……明久。お前馬鹿だな。」

「それは分かつてゐる」

「そりが、だつたら言つておくー俺はお前みたいな馬鹿に土下座されて頼まれなきゃ動かないやつだと思つのか？」

「えつ？」

雄一の言葉を聞いて、僕は思わず顔を上げると雄一は……

「俺達は馬鹿だからな頼まれていない仕事は勝手にやらせてもいいわ  
ぜーそれに……あの糞ガキども元湊たちの凄さを分かってやるわ  
ーーー！」

「…………雄一。あつがとい。そしてめん」

「おー、なんで謝るんだ？」

「実は雄一のことだから絶対に僕の頼みなんて断るだらうと思つて  
……霧島さんに嘘を教えて脅してもらおうかと……」

雄一は僕の言葉を聞いて冷や汗をかいていた。そして……

「なんて嘘をついた！」

「『雄一は男バスの人たちと約束した』って

「なんてだ」

「『もしも智花ちゃんたちが負けた場合……雄一は霧島さんを振つ  
て、竹中くんと付き合つ』って……」「歯ア食いしばれー！」

雄一は僕がついた嘘を聞いた瞬間、胸ぐらを掴んで殴りつとしていた。僕も殴られないように必死に抵抗をしていると……

『アキくーん？ 翔子さんが来てるわよ～』

「あつ、来たみたいだね」

「明久……あとで覚えてろよ…そして絶対に男バスを徹底的に負かせて、泣かしてやる！」

雄一はそう言いながら、訪ねてきた霧島さんに向きずられながら帰つていいくのであった。雄一……死なないよ!」……

そして翌日の放課後、僕らは昂くんと合流をして慧心学園に来てい

た。

「長谷川も元気になつてよかつたの?」

「ああ、ありがとうな。木下。」

昂くんと秀吉は握手を交わし、マッソリーはと離つと……

「…………元気になると思つて」

マッソリーはわざと離つて、昂くんに渡したのは……

「土屋。これはまことにから」

「大丈夫ー。きっと必要になる」

マッソリーが昂くんに何の写真を渡したか気になり、横から覗き込むとそれは……

『香椎愛莉のブラ透け』

「マッソリーーー。あとでそれ売つてー。（それは可哀想だよー。）」

「明久！何か言つてこむことと思つていること逆になつてるぞー！」

昂くんがツツツツを入れてきた。ふう、これはうつかりしてたぜ。

「とにかく明久、坂本が……」

昂くんがそう言いながら雄一の方を指さすと、雄一は体中に癌がで

きていた。

「ああ、気にしないで、あれはただの夫婦喧嘩の後だから」

「夫婦喧嘩って、霧島さんとか？」

昂くんがそう言つて、霧島さんが僕らに近づき……

「……絶対に勝とう！」

「あ、はい」

どうやら僕がついた嘘が霧島さんを燃え上がらせていたみたいだつた。これならなんとかなるよね。

そして僕らは体育館に着き、中に入つていいくと……

「「「「お帰りなさいませ、お嬢様！」」「」」

メイド服の智花ちゃんたちが出迎えてくれた。ムツツリーーはいつもみたいなカメラで智花ちゃんたちを撮りまくつていた。あとで売つてもらおうかな？

その後、みんなが体操服に着替えさせ、僕らは頼まれていた「コーチの日に来れなかつた事を謝つた。すると智花ちゃんたちは笑顔でゆるしてくれた。そして僕らは男バスに勝つための練習を始めるのであつた。

まずは智花ちゃん、愛莉ちゃん、ひなたちやんの三人にランニングをしてもらい、その手伝いとして、秀吉、霧島さんが行き、残った真帆ちゃん、紗季ちゃんにはシユートの練習をすることになった。見るのは僕、雄一、昂くん、ムツツリーの四人となつた。

「じゃあ、この距離からシユートをしてみるー今田から試合までその位置でシユートをするよ」といふに覚えておけばいいな

雄一は紗季ちゃんにシユートについての個人レッスンを行なつていた。紗季ちゃんはといつとなんだか不満そうに……

「少し遠くないですか？」

「大丈夫だ。シユートを打つてみる」

「はー」

紗季ちゃんは黙り、シートを打った。だけどそのシートは外れてしまった。

「あ……」

「おじいが、少しずつ練習してけば入るようになるからな。」

「はーー。」

雄一の指示を聞いて、紗季ちゃんは返事をする。それにしても雄一、あんなに近い距離で指示出してたら……

『雄一……小学生に欲情を……』

「ほり、声が聞こえた。雄一……頑張れ！

「ねえ、あつきー？ ちやんと見ててよ」

すると真帆ちゃんが今度シートを打つ番となつた。  
「「「ねん」「ねん。 いこよ、打っても」

「よし、入れー！」

真帆ちゃんは「ール目掛けてシートを打つ。だが、そのシートも外れてしまった。真帆ちゃんは少し落ち込んでいたけど、僕は直ぐにほげました

「大丈夫だよ。フォームはいいし、あとは練習していけばいいから」

僕はそう真帆ちゃんを励ましてるなか、ふとムツツリーーが何かをやつているのに気がついた

「ムツツリーー? 何やつてるの?」

「……明久。男バスがこの間の休日によつた紅白試合の映像を回収していた。」

「へえ、ムツツリーー。やるね。まさか智花ちゃんたちの練習風景を盗撮していた隠しカメラが役に立つなんてね」

「ブンブンー!」

ムツツリーーは必死に否定していたけど、明らかに偶然撮れてしまつたものだよね。それ……

とうあえず練習に戻るつとする秀吉が慌てた様子で体育館に入ってきた。

「大変じや、袴田が!」

ひなたちゃんに何かあつたのか? 僕らはそつ悪い、外へと出るのであつた。

## 第5話 再開と一つ名 前編（後書き）

次回は一つ名について触れます。とりあえず次の更新は明日、ゆる恋の本編と番外編と同じ時間に上げる予定です

## 第6話 再開と「一つ名」後編（前書き）

今回は後編となつます。話題には「一つ名」として触れるつもりです。

## 第6話 再開と一つ名 後編

秀吉の知らせを聞いて、僕たちは体育館の外に向かうとそこににはソーニングをしていたひなたちゃんが倒れていた。

「ひなたちゃん大丈夫？」

僕と昂くんが倒れたひなたちゃんに尋ねるとひなたちゃんは……

「……大丈夫……だよ……お兄ちゃん……」

「「ぐはっ」「

何故かひなたちゃんから物凄く可愛らしきオーラを感じて、昂くんがひなたちゃんを背負い、一緒に保健室へダッシュするのであった。

「一体何があったのじゃ？ 明久と長谷川は……」

「ああな。とりあえず俺達も保健室に行くか。湊、案内してくれ

「あつ、はー」

雄一たちも保健室へと向かうのであった。

保健室へ向かおひとする僕らはとこいつと……

「ひなたちやん…すぐに保健室に連れてくからー。」

「「」やー「」やー「」やー、大丈夫。お兄ちゃんたちのおかげで少し元気になりました。」

「やつか

僕らは下駄箱で靴を脱いとすると、ひなたちやんを背負つてこの昇くんは靴を脱いとしなかつた。

「どうしたの？ 昇くん？」

「あつ、いや、靴をキツく縛つて……脱げないんだ。悪いけど明日脱がしてくれないか？」

「あ、うん、分かったよ」

僕は昂べたの靴紐を解いてじっといる……

「ひなたー？お前何やってるんだよー。」

あるといの間合つた竹中がいた。

「おー、竹中」

「てか、何でお前らがいるんだよー。」の間コーチが終わつたって言つてたるー。」

「悪いけど、わけあつて続ける」とこじったんだ

「僕らも勝手にやつてるだけだし、」

「ぐう、とこつかひなたを降らせよー。」

「これもさうとわけあつて降らせないんだー。」

「もしかして、怪我でもしたのか？」

何故か竹中くんはひなたちゃんを心配そうにしてた。どうしてだろう？竹中くんつて女バスの子嫌いみたいな感じしたんだけどな……

「おー、じゃない」

「そっか、よかった……」

うーん、やっぱおかしい。何かひなたちゃんだけ甘い気が……

「ほう、男バスの糞ガキがいるじゃねえか」

すると後ろから声が聞こえ、振り返るとそこには雄一達がいた。すると竹中くんは……

「誰が糞ガキだ！いいか、あんたらがコーキやつた所で今度の試合で俺たちは負けるつもりはないからな！」

竹中くんはそう言い残して去つていった。一体どうしたんだろ？

ふむ、あの女郎と握手をしちゃうか……もしかして……」

すると秀吉が何かに気がついた。さらば雄一も……

「ああ、いいやうの反応を見るかぎり……これは試合に使えるぞ」

あれ？何か雄一が何か悪だくみしてゐる。もしかして……

「雄一！ いくらシヨタに目覚めたからって竹中くんを襲う気？」

霧島さんは雄一処刑を行うのであった。そんな中僕らが出来ること  
はひなたちゃんと智花ちゃんにトラウマが出きないように見せないことだつた。

よつやく保健室にたどりついた、僕、昴くん、ひなちゃん、智花ちゃん、秀吉、霧島さん、雄一（臨死体験中）。中に入るとそこには容姿はレイヤードのショートヘアと縁無し眼鏡をかけた物腰の柔らかい理知的な大人の女性が椅子に座っていた。

「あら？ どなたかしら」

「あ、俺たちは今、バスケのコーチを……」

「ああ、聞いてるわよ。確かに美星ちゃんの甥っ子の昴くんにその手伝いをしに文月学園から来た子達ねー。」

「おー冬子」

「ぐすり、あなたたちも無垢なる魔性の餌食みたいね  
イノセント・チャーム

「え？ なんすかそれ……」

「無垢なる魔性……。その子のふたつ名よ。私……生徒にあだ名をつけるのが好きなの……」

保健の先生は僕らに女バスメンバーの一いつ名を教えてくれた。愛莉ちゃんは七色彩薺ブリズマティック・パープル、真帆ちゃんは打ち上げ花火ファイヤー・ワークス、紗季ちゃんは氷の絶対女王政アイス・エイジ。それぞれのふたつ名を聞いて興味を沸いた。

「へえ、僕もそういう二つの名欲しいな」

「何を言つておる。明久よ。主にもあるじやろ」

あれ？ 僕にも何か二一つ呟つてあつたつけ？

「バカ観察処分者じゅうぶんしゃ」

「それ、二一つ名だけずくく嫌な部類に入るやつだよ秀吉ー…それに秀吉には立派な二一つ名だつてあるし」

「なんじや？」

「秀吉せいじ」

「わしは男じやー…」

僕らがいつも言い争いをしていると、霧島さんがあることを言つた。

「……先生、智花にはないんですか？」

せつこえば、せつも紹介した中に智花ちゃんのが無かつたような…

すると先生は…

「智花ちゃんには……まだないのよ」

「えつ、わうなの？ 智花ちゃん？」

「はい、私、5年生の時に転校してきたので……それで…」

智花ちゃんがそういうのであった。

それから保健室にひなたちやんと雄一を寝かせ、霧島さんと智花ちゃんは一人に付き添うのであった。僕らが体育館に戻る途中で、昂くんがある提案をした。

「なあ、明久、木下。ちょっと相談があるんだけど、いいか？」

「ん？ 何？」

「いや、智花の「つむぎ」についてなんだけビ……考えてやつたになつて思つて……協力してくれるか？」

「それべうこだつたら、喜んで」

「つむ、わしも賛成じや」

こうして、僕らは女バスのコーチの他に智花ちゃんの一つかを考えるのであった。



## 第6話 再開と「一つ名」後編（後書き）

智花の「一つ名はやつぱり原作とは違う感じがいいですね。」とあります。次回は愛莉の話となります。ちなみに、ちょっととしたアンケートです。智花の「一つ名について」はもう考えてあります。翔子にも「一つ名をつけよう」と思っています。何か案があればメッセージか感想で送ってください。では、また次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5239y/>

---

バカとバスケと召喚獣

2012年1月5日18時28分発行